

GVHD第2相 臨床来夏目指す

ヒューマンライフコード

製造原価、骨髄の半分

ヒューマンライフコード（東京都中央区、原田雅充社長）は、へその緒由来の間葉系細胞を用いた移植片対宿主病（GVHD）を適応症とする第2相臨床試験で2021年夏の実施を目指す。骨髄移植後にGVHDを発症した患者に間葉系細胞を投与する。同疾患の原因である過剰炎症を抑える効果が期待できる。

ヒューマンライフコードは、へその緒から間葉系細胞を取り出して医薬品にする技術を持つ。同細胞は炎症を抑えるといわれる。移植片を異物と認識、攻撃することで過剰炎症の活用可能性がある。また組織の損傷を修復する機能も期待されており、GVHDの症状である口内炎や皮膚のただれなどを修復する可能性もある。一般の間葉系細胞は備蓄も可能（培養中の画像）

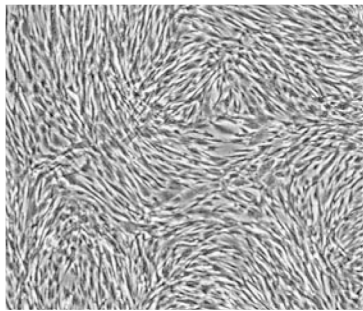
植片を異物と認識、攻撃することで過剰炎症の活用可能性がある。また組織の損傷を修復する機能も期待されており、GVHDの症状である口内炎や皮膚のただれなどを修復する可能性もある。一般の間葉系細胞は備蓄も可能（培養中の画像）

脂肪からも抽出、培養できる。ただ、採取の必要があり、負担が大きい。本来切つて廃棄するへその緒であれば、この課題を解決できる。

原田社長は「廃棄物を利用する上、高い増殖能力がある。製造原価が骨髄と比べて半分になる。備蓄も可能で、安定供給にもつながる。あらゆる場所で起こる炎症に活用できれば」と話す。

骨髄移植を実施した患者のうち、約3割がGVHDの治療対象になるといわれる。

間葉系細胞には他者を認識する免疫抗原「HLA」が発現せず、他人のものも使えないという。同社は侵襲性の少ないへその緒から抽出し、活用する。



間葉系細胞は備蓄も可能（培養中の画像）